

小学校社会科歴史学習における「琉球王国」の単元開発研究

澁谷友和

(東大阪市立縄手東小学校)

岩本廣美

(奈良教育大学 社会科教育講座(社会科教育))

A study on the process of the development of a unit for teaching the history
of “Ryukyu Kingdom” in social-studies at the elementary school level

Tomokazu SHIBUTANI

(Nawatehigashi elementary school, Higashiosaka City)

Hiromi IWAMOTO

(Department of Social Studies, Nara University of Education)

Abstract: The purpose of this study was to find a new approach to teaching Japan’s history at the elementary school level while focusing on the possibility of giving various viewpoints on the history based on the development of teaching unit of “The Ryukyu Kingdom” by introducing different perspectives of the history of Ryukyu Kingdom and Okinawa. During the process, we conducted a survey which helped to make it clear that the teaching of the history of Okinawa in elementary school tends to be focused only on the battle of Okinawa during the World War II. However, Kurayoshi Takara points out that this way of describing the history only gives a very limited perspective of the history of Okinawa by reducing the history of Okinawa to the battle of Okinawa and fails to show a well-balanced image. Our study has proved that, as a result of being taught a revised unit, the pupils have been able to see the history of Okinawa as a successive flow of events from the Ryukyu Kingdom to the formation of Okinawa prefecture, have renewed their understanding of Japan’s history in relation to the history of Okinawa and appreciate the history in a new light.

キーワード： 多様な歴史認識 various perspectives on history

琉球・沖縄史教育 History Learning of Ryukyu and Okinawa

琉球王国 Ryukyu Kingdom 琉球処分 The disposition of Ryukyu

1. 問題の所在

2000年5月に『琉球・沖縄史教育の現状と課題－沖縄県内公立小学校・中学校・高等学校の実態調査報告－』という調査報告書¹⁾が出された。琉球・沖縄史に関する授業の実施状況、指導方法、児童生徒の関心度などを選択式で問い、学校現場教師の悩み、要望などを記述してもらい回答を得たものである。

調査報告書によると、「琉球王国」「琉球処分」に関する授業実施は84%で、「沖縄戦」98%、「米軍基地」「沖縄返還」96%と比べ低い実施率となっている。その授業方法は、「琉球王国」「琉球処分」の授業が「教科書を読み合わせた程度」が最も多いのに比べ、「沖縄戦」と「米軍基地」「沖縄返還」に関しては「6・23沖縄慰霊の日の特別授業」²⁾「体験者からの聞き取りや調べ学習」

「地域の戦跡めぐり」など、沖縄県ならではの積極的な授業展開が見られる。

沖縄戦終結の日、6月23日は、沖縄県では「慰霊の日」であり、沖縄県の多くの小学校で特設授業を組み、沖縄戦の実態を示すとともに、平和の尊さを児童と考えていくという授業の様子が伺える。このような取り組みは、戦後の沖縄県における教育の特色だと考えられる。また、沖縄戦は、本土においても沖縄³⁾を歴史教材として取り上げるときに中心となるものであろう。筆者もこれまで、沖縄を取り上げ実践を重ね、「沖縄を教材とした社会科実践の研究」(2012: 澁谷・岩本)⁴⁾にまとめた。その内容も、沖縄戦の実態を示し、ひめゆり学徒隊として沖縄戦を体験した新川初氏⁵⁾との交流の中で学習を深めるところから始まる。続いて、戦後は日本社会から切り離され、アメリカの軍事的な直接統治下におかれたため、基地の

問題を始め、基本的人権さえ無視されるという過酷な事態を学ぶ計画になっている。

しかし高良倉吉氏は、このような沖縄戦をクローズアップする学習に対して、「沖縄歴史の全体像をしっかりと提示することがないままに、沖縄戦だけをクローズアップして語る傾向が見られることに危惧の念をいだいてきた。戦争とその反省点については、子どもたちにしっかりと伝えなければならない。しかし、沖縄戦はあくまでも沖縄の歴史の一部にすぎないのであり、その部分のみを取り出して語ったのでは、沖縄の歴史＝沖縄戦という誤解を与えかねないのではなかろうか。」と指摘している⁶⁾。

前述調査報告書の自由記述欄の中に、「輝いていた琉球王国の時代、進貢船の活躍時代も大きく取り上げていく方が、自信が生まれてくると思っている。」「沖縄の歴史では暗いイメージが強いが、子どもたちが故郷を誇れる歴史的な内容をもっと増やしてもいいのでは。」という高良と同じような意見も寄せられている。

以上のような観点から、本研究では、小学校社会科第6学年の歴史の授業において、琉球王国時代の単元開発事例を提案する。沖縄戦を含む歴史の全体像に興味をいだかせるためには、困難な話題ばかりを強調する沖縄の歴史像だけでなく、いつの時代においても、歴史を生きた人々がたくましく活動した、そのダイナミズムをわかりやすく提示する必要がある。そして、日本の歴史に、琉球・沖縄史からの視点を取り入れることにより、第6学年の歴史の授業に多様な見方を導入するきっかけになると考えられる。

2. 小学校社会科教科書の中の琉球王国

2000年の調査報告書において、「琉球王国」「琉球処分」の授業では、「教科書を読み合わせた程度」という回答が最も多いという状況ということであったことから、教科書を読み合わせた程度で、どの程度学習が深まるのか検討する必要がある。

第6学年社会科教科書5社の「琉球王国」に関する記述を見ると、5社ともに最初に出てくるのが、江戸時代におけるキリスト教の禁止と鎖国という内容のところである。平成20年版学習指導要領では「琉球王国」に関して直接言及されていないため、本文中に取り上げているのは2社のみである。全社ともコラムとしては取り上げていて、その中で蝦夷と琉球について記述されている。その記述は、表1のような内容である。

教科書の記述を詳細に見てみると、江戸時代まで琉球に対する記述が一度もないにもかかわらず、「琉球王国(沖縄県)は、17世紀初めに薩摩藩(鹿児島県)に攻められ支配された」という内容の記述がでてくる。どの教科書も記述量が少ないため、琉球王国と沖縄県の歴史のつながりを認識するのが難しく、児童が疑問を懐く部分であると考えられる。すなわち、琉球王国とはど

ういう国であるのかという疑問である。

琉球史には、いくつかの歴史的過程がある。1点目は、日本列島の社会と共通の文化的基盤から出発しながらも、琉球諸島社会がしだいに個性化の過程をたどり、古琉球⁷⁾の時代において日本列島の国家と明確に区別される独自の王国を形成したことである。2点目は、その王国が中国皇帝の冊封を受け冊封体制下の琉球としての立場を形成したことである。3点目は、中国との関係が深まる中で、朝鮮・東南アジア諸国とのネットワークができたことである。琉球王国は、当時の有力な中国商品を進貢貿易ルートで大量に確保し、その一部を日本、朝鮮、東南アジア諸国で売り、今度はそれぞれの国々の特産物を確保し、それを中国に輸出していた。中継貿易と呼ばれるものである。この中継貿易により、国家の最盛期をむかえることになる。

教科書では、江戸時代まで琉球王国の歴史的形成過程には一度も触れずに、最初に出てくる記述が、琉球王国は薩摩藩に攻められ支配されたという事実である。前述のアンケート調査結果にあった、教科書の記述を読むだけの学習ですませるといことになると、琉球王国成立の過程、中継貿易による王国最盛期という琉球王国時代の中心部分を知ることがないため、児童は断片的な知識を得るにとどまる恐れがある。

また、同様な事例が、明治時代における「新しい政府をつくる」という内容の中でも見ることができる。5社ともにコラム的な扱いの「北海道と沖縄」で、明治政府が沖縄県として日本に統合したことが紹介されている。その記述も表1にまとめてある。1879年の琉球処分によって王国が崩壊したという記述であるが、ここでも記述量が少ないため、琉球処分に至る流れが理解しにくい記述になっている。また、明治政府側から見た記述が中心になっているために、琉球側が反対したことや、琉球に対する宗主権を楯に中国側が強く抗議する状況であった⁸⁾ことが、記述からは全く伝わらない。このような琉球側の反対や中国側の抗議があったからこそ、明治政府としては軍隊・警察官を本土から動員し、力づくで首里城の明け渡しを迫る行動にでるしかなかったという歴史の流れに対する記述が欠けているものが多いと考えられる。これもまた、琉球王国に関する記述と同じく、明治時代に琉球王国が廃藩置県により沖縄県になったという断片的な知識を得るにとどまる恐れがある。

このように、琉球王国や琉球処分に関する教科書の記述は、中央政権である江戸幕府や明治政府の視点による日本の歴史の学習が中心であり、そこに琉球・沖縄史のことが付加されているにすぎないといえる。教科書を読み合わせるだけで済ませてしまうと、中央政権を中心とする一元的な歴史しか学習できない⁹⁾。また、付加されているだけであるために、取り上げなくても授業は進められる。従って、琉球王国を授業で全く取り上げないこともあると推測される。

表1 平成23年度版社会科教科書における琉球王国に関する記述

出版社	各社の琉球王国に関する記述	各社の琉球処分に関する記述
教育出版	(本文中) 沖縄には、中国や東南アジアの国々と交流し、独自の文化をもつ琉球王国が栄えていました。17世紀初め、幕府は、薩摩藩(鹿児島県)を通じて琉球に力をおよぼすようになりました。そして、琉球を通して、中国などの産物を手に入れました。(コラム) 琉球王国は、東南アジア・中国・朝鮮・日本をつなぐ貿易の中継地として、重要な役割を果たしていました。しかし、薩摩藩の支配を受けると、年貢を納入するなどの負担をしいられ、貿易の利益もうばわれるようになりました。	一方で、政府は、中国(清)ともつながりをもっていた琉球王国を、軍隊と警察の力で、沖縄県として日本に統合しました。
日本文教出版	(コラム) 15世紀初めに成立した琉球王国(沖縄県)は、日本・中国・東南アジアとの貿易で栄えていました。しかし、17世紀の初めに、薩摩藩(鹿児島県)にせめられ、政治かんとくされるとともに、毎年ねんぐを取り立てられるようになりました。薩摩藩は、琉球王国に中国との貿易を続けさせて、その利益も手に入れました。	沖縄にあった琉球王国は、江戸時代には、薩摩藩の支配を受けながら、中国(清)にも従う形をとっていました。明治になると、政府は沖縄に琉球藩を置き、国王を藩主にしました。その後、沖縄に軍隊を送って廃藩置県をおこない、首里城から国王を追放して、沖縄県知事を任命しました。このことにより、400年以上におよぶ琉球王国の支配は終わりました。
光村出版	(コラム) 琉球王国は、江戸時代の初めに薩摩藩(鹿児島県)に支配されました。薩摩藩は、琉球王国の政治を指図し、高い率の年貢を取り立てました。また、薩摩藩は、将軍や琉球王が代わるたびに、多額の費用をかけさせて、琉球の使者を江戸まで行かせました。このため、琉球の人々の暮らしは、たいへん苦しいものとなりました。薩摩藩は、琉球が以前から行っていた中国との貿易を続けさせ、その利益の多くを藩のものとして取り上げました。	沖縄は、江戸幕府の支配体制に組みこまれながらも琉球王国が続いていました。明治維新の後、政府は、琉球王国を廃止して琉球藩とし、後に沖縄県としました。
東京書籍	(本文中) 江戸時代の初めに薩摩藩(鹿児島県)に征服された琉球(沖縄県)からは、琉球国王や徳川の将軍がかかるごとに使節が送られてきました。(コラム) 室町時代のころ、琉球王国は、アジアの国々との貿易で栄えていましたが、江戸時代の初め、薩摩藩に征服されました。その後も中国とは貿易を続けましたが、その利益の多くは薩摩藩がうばいました。さつまいもなどが中国から琉球を経て日本にもたらされました。	政府は琉球が日本の領土だと主張して琉球藩を置き、琉球国王を藩王としました。そして1879年には、中国(清)や琉球の人々の反対をおさえ、沖縄県を設置しました。国王は東京に移住させられ、琉球王国はほろびました。
日本文教出版「日本のあゆみ」	(コラム) 沖縄を治めていた琉球王国は、17世紀はじめ、薩摩藩(鹿児島県)にせめられ、その支配のもとにおかれました。薩摩藩は、政治を指図するとともに、検地を行って高い年貢をとり立てました。中国との貿易は続けさせ、琉球を通じて清から上質の生糸などを買とり、琉球の特産物である黒砂糖とともに国内で売り、大きな利益をあげました。	江戸時代、琉球は、日本と中国(清)との両国に使いを送っていました。政府は、琉球が日本の領土であることを明確にするため、1872(明治5年)、琉球の王を藩主とする琉球藩を置きました。さらに、1879年、軍隊を送って首里城を占領し、琉球藩を廃止して、沖縄県とすることを強行しました。

琉球・沖縄史を日本列島の歴史を構成する一つとしてとらえ、日本の歴史を琉球・沖縄の歴史からとらえることにより、多様な見方によって日本の歴史を学習することができると考えられる。

3. 沖縄県・大阪府の小学校における取り組み状況

では現在、学校現場において、琉球王国についてどのように扱われているのかを明らかにするため、前述の沖縄大学地域研究所のアンケート調査を参考に、沖縄県、大阪府の小学校にアンケート調査を行った。調査時の使用教科書¹⁰⁾に沿った琉球・沖縄史の主な内容の授業の実施状況と指導方法、児童の関心状況について選択式で問い、教師の悩み、要望を記述式で回答してもらった。沖縄県は、沖縄本島とその周辺の島々にある小学校の

中から無作為に約半数の112校を抽出し、大阪府は、筆者在勤の東大阪市53校、大阪府北部の豊中市42校、そして沖縄県出身者が多く住んでいる大阪市大正区¹¹⁾11校の計106校を抽出した。調査時期は2012年12月21日から2013年1月18日で、回答数は表2の通りである。

表2 琉球・沖縄史教育に関するアンケート回答数

	学校数(校)	回答数(校)	回収率(%)
沖縄県	112	33	29.5
大阪府	106	27	25.5
大正区	11	2	18.2
豊中市	42	16	38.1
東大阪市	53	9	17.0
全体	218	60	27.5

沖縄県、大阪府の琉球・沖縄史の授業実践状況について問い、まとめたものが、図1である。教科書でも取り

上げられている、琉球王国、琉球処分、沖縄戦、沖縄返還・米軍基地の実践状況について回答してもらった。

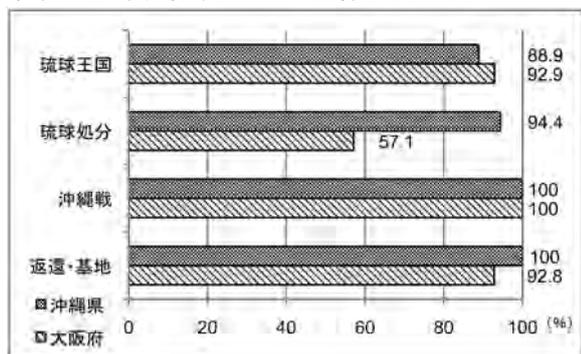


図1 沖縄県・大阪府の琉球・沖縄史の実践状況 (アンケート調査による)

今回のアンケート調査でも、2000年の調査結果と変わらない様子が浮かび上がってきた。沖縄県、大阪府とも、沖縄戦を取り上げ授業実践している学校は100%という状況に比べて、琉球王国に関しては、沖縄県88.9%、大阪府92.9%とやや低い実施率となる。また、琉球・沖縄史の中で大きな歴史的变化であったはずの琉球処分に関しても、沖縄県94.4%、大阪府57.1%と、沖縄戦に比べて大阪府は特に低い実施率となる。

次に、琉球史の指導に関する取り組み方法について、図2にまとめてみた。この項目も2000年調査と結果が変わらず、沖縄県では61.7%、大阪府では72.5%の学校が、琉球王国、琉球処分に関しては教科書を読むだけで済ませていることがわかる。先ほど述べた教科書の問題点と合わせて考えると、児童は断片的な知識を得るだけで、琉球王国から沖縄県へという歴史の流れ、そして多様な歴史認識を得ることが難しい現状であることがわかる。これに対して、授業実施率100%の沖縄戦に関しては、沖縄県では総合学習も合わせて慰霊の日前後の特別授業を組んでいる学校が多く、大阪府でも、教科書を使って1時間抜きの授業を組んで実践している学校が多い。琉球史に関する取り組みとの差が歴然としていくことがわかる。

なぜ、このように取り組みの差がでるのだろうか。その原因を自由記述から読み取ることができる。「基地問題を考えると、沖縄戦、琉球処分・・・と歴史をさかのぼって子どもたちに知らせ、考える必要があると思います。」(豊中市教員)、「大阪の小学生にとっては、ある意味、身近ではないものになってしまいがちだが・・・」(豊中市教員)という記述が寄せられたように、琉球史を扱うことは大切であると感じながらも、「日本通史を終えるのに精一杯で、時間的余裕がない。」(沖縄県教員)、「琉球史についての知識がない。」(東大阪市教員)、「琉球史に関する、教科書の記述が不十分なうえ、教材も不十分である。」(沖縄県教員)、「琉球王国や琉球処分については、教科書の流れの所とは別の場所に記述があるので、読み合わせの授業となりました。取り上げるほどの時間の余裕がありませんでした。沖縄戦・米軍基地・

沖縄返還については、授業の流れの中で取り組めたので、時間を取って授業ができました。」という現場教師の苦悩や意見が記述されている。

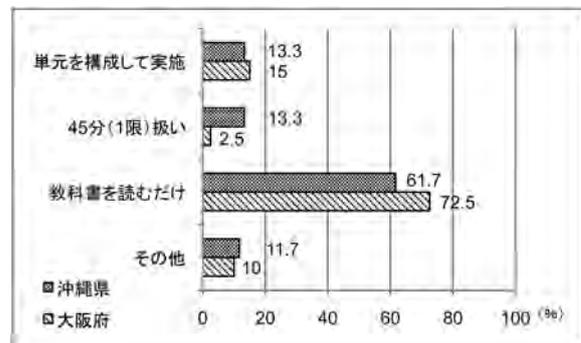


図2 沖縄県・大阪府における琉球史の取り組み方法 (アンケート調査による)

沖縄県、大阪府の授業実践状況が明らかになってきたのだが、このような状況で児童の関心を持ったテーマについてもたずねてみた。それが図3である。

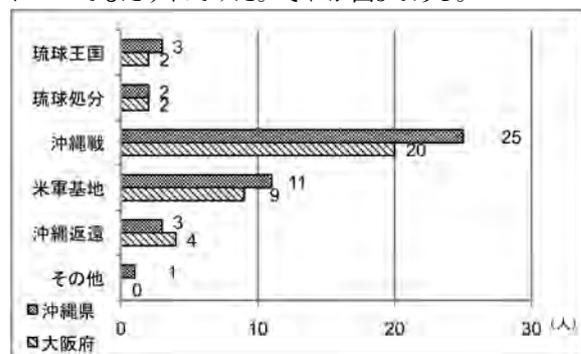


図3 沖縄県・大阪府の児童が関心を持ったテーマ (アンケート調査による：複数回答)

沖縄県、大阪府ともに、琉球王国や琉球処分への関心が最も低い結果になった。琉球史の授業は、知識がないうえに時間が足りないので取り組めない、取り組んでも教科書を読むだけとする消極的な状況と、沖縄戦の授業は必ず取り組み、積極的な授業形態をとって実践している状況から考えると、当然な結果とも言える。高良が指摘した「沖縄の歴史=沖縄戦という誤解を与えかねないのではないだろうか。」という問題点があったため明らかになったと考えられる。

4. 開発・実践の内容

アンケート調査の自由記述欄には、他にも、「沖縄以外の人たちにも、沖縄の歴史を日本の歴史の一つとしてもっと知ってもらいたい。」(沖縄県教員)という記述もあった。琉球・沖縄史の視点を取り入れることにより、多様な見方によって日本の歴史を学習することができるようにとの着想から、2012年11月6日～9日にかけて「アジアの中の琉球」というテーマで授業実践を行った。3時間の授業と、まとめの映像¹²⁾視聴と感想文の記述で1時間を取り、計4時間の実践となった。枠内は単元の概要である。

- (1) 単元「アジアの中の琉球」
 (2) 学年・組 第6学年1組 (21名)
 (3) 単元目標
 ・日本列島の社会と共通の文化的基盤から出発しながら、琉球諸島社会がしだいに個性化の過程をたどり、古琉球の時代において日本列島の国家とは明確に区別される独自の王国を形成したことを理解する。
 ・琉球王国が、アジアの国際社会と交流しつつ歴史を形成してきたことを考えることができる。
 ・1879年の琉球処分によって王国が崩壊し、「沖縄県」が設置されたことを知る。
 (4) 単元計画 (全4時間)
 「アジアの中の琉球」…4時間
 ・琉球王国の成立 (1時間)
 ・琉球王国最盛期を支えた中継貿易 (1時間)
 ・琉球処分～琉球から沖縄県へ (1時間)
 ・まとめ (1時間)

今回の実践は、社会科年間配当時間105時間のうち4時間を費やした。筆者の勤務校が使用している教育出版「小学社会」(上)の年間計画を参考に検討し、確保した。上巻の歴史分野には73時間(予備8時間含む)が充当されている。大単元「大昔の暮らし」(通常14時間・予備2時間)、「武士の世の中」(通常24時間・予備2時間)、「近代国家への歩み」(通常14時間・予備2時間)、「戦争から平和へ」(通常13時間・予備2時間)という時間配当になっているのだが、この時間から、「近代国家の歩み」14時間のうち1時間、予備を3時間配当して実践を進めた。また、この実践は、明治政府の政策である廃藩置県の学習が済んでから行った。琉球王国の成立や中継貿易は室町時代～戦国時代の話であるが、琉球処分に關しては、廃藩置県の学習が済んでからの方が理解しやすいのではないかと考えたからである。

5. 授業実践の主な経過

5. 1. 「琉球王国の成立」の授業

11月6日に実施した琉球王国成立を考える授業では、児童の興味・関心を高めるため、身近にある大阪城と首里城を比較するところから進めた。児童は、同じ日本にありながら、首里城は日本の城郭建築とは大きく異なっていることにすぐに気付いた。例えば、色彩が異なることや、天守閣の有無である。難しいと予想された類似点についても気付く児童が現れた。中央がふくれ、端部が反っているS字型の軒先板である唐破風¹³⁾と呼ばれる日本建築の特徴の一つを見つけたのである。金龍の彫刻や朱色の色彩などから、大多数の児童は、中国の影響しかないと考えていたのだが、日本建築も取り入れられていることに気づき、驚いた様子であった。このように首里城の特徴は、主に中国と日本の建築様式を、自国

の風土や嗜好に合わせ、自在に融合した琉球建築¹⁴⁾と呼ばれるものであり、大阪城と比較することにより、鮮明にそのイメージがつかめたのではないかと考えられる。しかし、児童の中から「日本にあるのだから、日本の特徴があつて当然なのではないか。」という疑問も出された。そこで、琉球国王と中国皇帝の姿の図を見せ、様々な面で中国の影響を受けていることを知らせ、中国(明)との関わりが深いわけを考えてさせた。そのキーワードとして、卑弥呼の時代で学習した朝貢冊封体制を取り上げ考えさせた。既習事項であったため、すぐに、琉球国王と明皇帝との関係、琉球国王は明皇帝から任命されて国を治めていることに気付いた。最後に、この朝貢冊封体制の両国の利点を考え、意見交流させた。考える手立てとして、貢物をもって朝貢すると明からの返礼として何倍もの高価な品々が贈られることを伝えた。そしてさらに、この時代は商人どうしの貿易が行いにくい状況であったので、朝貢が中国の品を手に入れることができる手段であったことを付け加えた。意見交流の初めは、「琉球王国側のほうが得やなあ。」というつぶやき程度であったが、そのつぶやきから交流が活発になった。「大きな国から国王に認められるし、高価な品も手に入るし、小さな王国の賢い生き方やん。」「明も、高価な品を倍にして返したりして、従ってくれるようにしたのとちがう。」などと、核心をついた意見交流になっていった。意見交流の最後に、450年にもわたる朝貢冊封体制という関係から中国の影響が大きかったこと、その中で琉球王国の最盛期を築いた尚真王の業績を紹介した。授業の最後には、琉球王国は日本列島の社会と共通する部分はあるが、日本列島の国家と明確に区別される独自の王国を形成したこと、その王国がアジアの国際社会と交流しつつ歴史を形成してきたことを伝え、まとめとした。

5. 2. 「琉球王国の最盛期を支えた中継貿易」の授業

11月7日は、琉球王国がアジアに進出し、繁栄の大きな礎となった中継貿易についての授業を進めた。授業の導入として、首里城に掲げられていたと言われる万国津梁の鐘¹⁵⁾に刻まれている文言から考えさせた。文言の中でいくつか空白にしておいて、その空白部分(資料1の網かけ部分)に当てはまる事柄をグループで考えながら、まずは親しむところから始めた。前時の学習の成果もあつたのか、あまり的外れな意見はなかった。

(資料1) 琉球は、**南**の海の恵まれた場所にあり、朝鮮からはすぐれたところを取り入れ、**中国**や**日本**とも大変親しくつきあっている。この**日中**両国の間にある「ほうらいの島」のような琉球は船によって**世界**に橋をかけ、珍しい宝は国内のいたるところに満ちあふれている。

(高良倉吉『琉球王国』より引用)

児童全員で声に出して文言に親しんだ後、「万国津梁の鐘に刻まれていることは、いったいどういうことなのか」

ということを受業全体の課題として授業を進めた。まずは児童に、明時代の朝貢回数資料から、それぞれの国の場所と位置関係を地図帳で確認させながら、資料から読み取れる情報を確認させた。資料2は授業で活用したものである。

(資料2) 1368年～1644年にわたる明への朝貢回数

1位：琉球王国	171回
2位：安南(ベトナム)	89回
6位：シヤム(タイ)	73回
10位：朝鮮	30回
12位：マラッカ	23回
13位：日本	19回

秋山謙蔵『日支交渉史研究』

(高良倉吉『琉球王国』より引用)

資料2から読み取れる情報として、児童から「琉球王国が171回で圧倒的に多い。」「日本と中国より、琉球王国の方が中国と親しい。」「琉球だけ特別扱い。」という発言が聞かれた。前回の授業で考えた、商人どうしの交流が難しく、中国の価値のある品を手に入れるためには朝貢という手段をとる必要があったということから、各国は中国の品が手に入りにくいという意見が児童から出されるのではと予想したが、この発言は得られなかった。

琉球だけが優遇されていたという児童の意見にさらに迫るべく、次に考えさせたのが「なぜ、琉球をこれほどまでに優遇したのか」という発問である。優遇されていたことをさらに強調するために、朝貢する琉球王国のために、明が中国人の通訳や船も用意していたことを伝えた。難しい発問と思われたが、児童の意見交流の中で核心をつく意見が出された。「沖縄が持ってくるものが欲しかったから。」「沖縄に珍しいものがあるから。」という意見である。何が欲しかったのかという部分は難しいと予想したため、1つ目はモンゴルに対抗するための小型で扱いやすい琉球馬、2つ目は火薬の原料になる硫黄¹⁶⁾であったことを伝えた。

琉球王国が優遇されるわけを考えることができたところで、次はアジアの国々とのつながりを考えさせた。授業の初めに児童から意見が出されなかった、琉球王国以外の国々は中国の価値の高い品が手に入りにくいというところから考えてさせていった。また、中国側の視点として、琉球王国の物は手に入るが、それ以外のアジア諸国の品々は手に入りにくいという状況も伝え、琉球王国が考える手段を、琉球国王の立場になって考えさせた。最初は、「中国のものを、他の国に売る。」「交換してくる。」というような核心に迫りそうな意見を口々につぶやいていたのだが、しだいに、整理された意見が出されるようになった。それらをまとめると、クラス全体の意見として次のようになった。「中国の品を、朝貢によりたくさん手に入れることのできる琉球王国は、いろんな国で中国の品を欲しがっているところで渡してあげる。そして、いろんな国のものを中国へ持って行く。」というような意見であ

る。渡す、あげるというように売買の感覚がなく、少し表現力不足であるが、中継貿易の核心をつくことができているのではないかと考えられる。琉球王国が優遇されていたことをいかし、アジアの国々をつなぐことにより利益をだし、国を繁栄させたこの手段は中継貿易と呼ばれること、そしてその中継貿易によりどのような品物が琉球王国を中心にして貿易されていたのかを伝えた。琉球王国は琉球馬や硫黄、夜光貝や芭蕉布などを貢品とし、中国から陶磁器や絹織物を買いつけ、それを日本や東南アジアに輸出、日本では日本刀や扇子を買って中国や東南アジアへ、東南アジアでは香辛料や象牙、蘇木を買って中国や日本へ輸出したとされており、典型的な中継貿易を展開¹⁷⁾したのである。

そして最後に、授業の最初に取り上げた万国津梁の鐘の文言を活用し、「万国津梁の鐘では、琉球が一番えらい、強いというようなよくある自国の自慢はせずに、自分たちはいろんな国をつなげてうまくやっていると自慢している。琉球王国の繁栄の理由は、アジア諸国をつなげる役割を果たしたからである。」というまとめをした。

5. 3. 「琉球処分～琉球から沖縄県へ～」の授業

3時間目の授業では、1609年の薩摩の琉球侵入¹⁸⁾により琉球王国が近世日本の幕藩制国家に編成されたこと、1879年の琉球処分によって王国が崩壊し、「沖縄県」が設置されたことについての授業を進めた。特に琉球処分の部分では、教科書の記述で明治政府が沖縄県として統合したことのみしか書かれていないため、琉球側の視点を加えることを意識しながら進めた。

この授業では、琉球の江戸上り¹⁹⁾と加賀藩の参勤交代の図を見比べることを導入とした。参勤交代は既習事項であるが、独立した琉球王国が江戸に行く理由を考えさせた。難しい発問であったため、児童からは「衣装を見ると、お祝いに行くみたい。」というような意見が出なかった。そこで、江戸上りの目的、幕府の将軍や琉球国王が代わる度に江戸に行っていたことを児童に伝えた。伝えた情報から考えが深まりだし、独立した王国が江戸に行く理由に矛盾があるのではないかとこの発言をする児童が出た。「江戸の将軍が代わったときにお祝いを言いに行くのはわかるが、琉球国王が代わったときも行くのはおかしい。来てもらうのだったらわかるけど…」という内容である。この発言からいくつか意見が続いた。「琉球が江戸幕府より低い感じがする。」「同じ国どうしなのだから、同じような扱いにしないと不平等だ。」と核心に迫りだす。ここまで迫ってきたところで、1609年の薩摩の琉球侵入を紹介した。ここで、幕藩制国家の基本的な原理は薩摩藩を介して琉球にも導入され、「幕藩体制下の琉球」という性格と、中国皇帝の冊封を受けこれに進貢するという関係も存続したため「冊封体制下の琉球」という性格、二つの性格を含む王国となり、琉球王国の難しい立場について伝えた。

続いて琉球処分について考えさせた。処分という言葉から、「琉球王国が悪いことした感じがするね。」という発言をする児童もいた。教科書を読みあわせた程度では、恐らくこのような認識にとどまることもあり得ることだと考えられる。教科書には記述がないので、1868年の江戸から明治への世替わりの復習と合わせながら、琉球処分について考えさせることにした。廃藩置県の学習までは済んでいたもので、比較しながら進めることができた。まずは、明治天皇即位の慶賀に訪れた琉球使節へ、天皇が「尚泰王を琉球藩王とし、琉球王国を琉球藩とする」と伝えた言葉から考えさせた。児童は「藩王とか、琉球藩というのが何だろう。」というような疑問は持つのだが、そこから発展はしなかった。そこで、これまでの薩摩と中国に仕えていた状況から、日本、琉球王国、中国の三国が、琉球王国に対してどのような立場なのかを考えさせる発問に変えてみた。この発問だと、児童の発言が活発になった。児童が考えた各国の立場は以下のようにまとめることができる。

日本⇒琉球王国を日本の領土にしたい。しかし、一気にしてしまうと外国からの反発が大きいと思う。
 琉球⇒これまで通り、中国に冊封してもらい王国を残したい。でも日本をどうしたらいいのか悩んでいる。
 中国⇒琉球王国は、古くから朝貢している国。日本には渡せない。

以上の各国の立場を検討すると、児童なりに考え、意見交流ができ、琉球処分という一つの出来事を多面的にとらえることができたのではないかと考えられる。藩王、琉球藩という言葉から考えるより、児童にとっては、各国の立場を考える方が取り組みやすかったようである。児童の考えをいかしながら、1879年の琉球処分について授業をまとめた。沖縄県設置について琉球王国側が頑強に反対し、また、琉球王国に対する宗主権を楯に中国側が強く抗議する状況の中で、明治政府としては軍隊・警察官を動員し、力づくで首里城の明け渡しを迫る行動に出るしかなかったというのが、琉球処分の姿であるはずである。沖縄県設置をめぐる、琉球・日本・中国の三者が紛糾した。それは、近世の琉球王国が、幕藩体制下・冊封体制下という二つの性格を含みながらも、独立した王国であったことに原因があるということ授業で伝えないといけないのではないかと考えた。たった2行の教科書にあるコラム記述では、各国の立場が全く伝わらず、一面的な見方しかできないと結論づけることができる。

5. 4. 本単元の開発意義

単元開発を通して、いくつかの成果が得られたと考えられる。

1点目は、児童が琉球王国から沖縄県に至る歴史の流れを連続的にとらえることができた点である。それは、単元終了後に書かせた児童の感想の中にあらわれてい

る。「沖縄戦や基地の問題も、琉球処分から始まった気がする。沖縄戦のことは、総合学習で学習してきたが、なんか歴史が一本につながった気がする」というような感想があり、高良が指摘する「沖縄の歴史＝沖縄戦という誤解を与えかねない」という危惧からの脱却を考える上で、重要な意味を持つと考えられる。また、「現在も、那覇空港を中心にして中継貿易を行うと、経済がよくなるのでは」という感想もあった。これは、現在進行している那覇空港のハブ化に通じる考え方である。歴史の学習から、現在の社会をとらえ直した感想と思われる。

2点目は、明治時代に本単元を位置付けたことの有効性を確認できた点である。本単元では琉球王国の成立から実践を進めた。明治時代まで進めて、そこから琉球王国の成立、すなわち中世まで戻り授業を展開したのだが、児童の学習に大きな混乱はなかった。それは、既習事項をいかしながら授業を進めることができたからだと考えられる。例えば、参勤交代と琉球の江戸上りを比較して学習を深めるということや、廃藩置県の知識から琉球処分を考えることができたことがあげられる。琉球王国の成立から考えると、室町時代に位置付けて授業を展開する案も考えられる。しかし、江戸上りや琉球処分の学習内容を考えると、本単元のように明治時代に位置付けるほうが、既習事項をいかせることから児童の負担は少ないと思われ、本実践は意義があったと考えられる。

6. 成果と課題

本稿では、琉球王国の単元開発を中心に、日本の歴史に琉球・沖縄史からの視点を取り入れることにより、多様な見方によって日本の歴史を学習することができるのではないかとこの点に着目して実践研究を行ってきた。その過程でアンケート調査を実施し、学校現場の歴史学習での沖縄の取り上げ方は、沖縄戦・沖縄返還・米軍基地問題というのが主要テーマになっているという現状を明らかにすることができた。高良が指摘する、沖縄戦だけをクローズアップして語る傾向があるため、沖縄の歴史＝沖縄戦という誤解を与えかねないという危惧が依然として学校現場にあることを明らかにした。その中で「アジアの中の琉球」という単元を開発・実践し、提案することができたことは、重要な意味を持つと考えられる。

最後に、小学校社会科における「琉球王国」の実践に関する課題を2点あげたい。

1点目は、授業時数の確保である。アンケート調査で見えてきたのは、教科書の日本通史部分を終えるのに一杯で時間的余裕がないという学校現場の状況である。鎌倉幕府の成立や、戦国時代の織田信長のことはよく知っている、「沖縄県はずっと日本の一部だと思っていた。独立した琉球王国という国の時代があるなんて知らなかった。」という児童からの感想を聞いたとき、これまでの取り組みでは、日本通史の中の琉球・沖縄史ではな

く、個別の歴史としてとらえられがちであったと反省する。今回、通史部分に影響を与えないという授業時数のことも考慮しながら、4時間での実践にまとめた。年間計画の予備の時間を当てはめながらの実践であったが、消極的な時数確保ではなく、通史部分でより一層精選を図り時間を配分するという積極的な時数確保という工夫の中で、実践ができればと考える。

2点目は、琉球王国を含めた琉球・沖縄史を日本通史全体に位置付けることが必要なのではないかということである。琉球と日本の関係は、琉球王国時代に始まったわけではなく、縄文時代以降から存在していた。例えば日本の弥生時代や古墳時代において、琉球産のゴホウラガイや宝貝が交易に使われ、特権階層のアクセサリとして利用されていた²⁰⁾と言われている。また、本実践で取り上げることができなかったが、琉球の江戸上りによる文化的交流もあった。このような交流があったことから、琉球と日本は関わりの中で、影響を与え合いながら独自の社会を形成したと考えられるのである。そのような歴史カリキュラムの構想と検証も今後の課題である。

付記

本稿は、澁谷の取り組みに岩本が協力してできあがったものである。文献収集、授業実践に関わる教材作成、アンケート調査票の発送等に岩本が協力した。

授業の学習指導案作成段階では、中村薫先生(当時奈良教育大学特任准教授) および松好伸泰先生(当時天理市立前栽小学校教諭)に貴重なご意見を賜ったうえ、授業の参観もしていただいた。英文要旨作成にあたっては、石部陸雄氏の協力を得た。以上の方々はこの場を借りて感謝申し上げたい。

本稿の骨子は、2013年10月26日、山形大学で開催された日本社会科教育学会第63回全国大会で口頭発表した。会場で有益なご意見を賜った琉球大学教育学部教授の里井洋一先生をはじめとする方々にも感謝申し上げたい。本稿の文責は澁谷にある。

注

- 1) 研究代表秋山勝『琉球・沖縄史教育の現状と課題－沖縄県内公立小学校・中学校・高等学校の実態調査報告－』沖縄大学地域研究所琉球・沖縄史教育研究班、2000年。
- 2) 1945年6月23日、日本軍の牛島司令官、長勇参謀長が摩文仁の司令部壕で自決した。この日は日本軍の組織的戦闘が終結した節目としてとらえられている。沖縄県では沖縄全戦没者追悼式が行われ、正午の黙とうなどにより、戦没者の霊を慰めるとともに、世界の恒久平和を願う。
- 3) ここでいう沖縄とは、とくに断りのない限り、沖縄島のことをさす。また、本土とは、沖縄県を除く他の都道府県を総称して呼ぶものである。

- 4) 澁谷友和・岩本廣美、「沖縄を教材とした社会科実践の研究」『奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要』第21号、2012年。
- 5) 沖縄戦で看護要員として動員されて、多くの犠牲者が出た「ひめゆり学徒隊」の生存者のうち唯一、関西で暮らしている。
- 6) 高良倉吉、『琉球王国』岩波書店、1993年、pp.8-10。
- 7) 高良『琉球王国』によると、グスク時代の始まりから、王国の樹立と王国基盤の確立、薩摩藩の侵攻までの約500年間、すなわち王国の形成・展開を基調とする一連の時代を「古琉球」と呼び、近世琉球と区別するとある。中世日本の時期に相当する。
- 8) 豊見山和行編『日本の時代史18 琉球・沖縄史の世界』吉川弘文館、2003年、pp.241-247。
- 9) 太田満は、多民族学習の観点から、アイヌ民族の位置づけを中心に小学校の歴史カリキュラムを提言している。(太田満「多民族学習としての小学校歴史学習－アイヌ史の位置づけを中心に－」『社会科教育研究』第117号、pp.16-26.)
- 10) 調査時の使用教科書の出版社は、沖縄県と東大阪市は教育出版、豊中市と大正区は日本文教出版であった。
- 11) 安里進・高良倉吉・田名真之・豊見山和行・西里喜行・真栄平房昭、『県史47 沖縄県の歴史』山川出版社、2004年、pp.280-286。
- 12) 歴史秘話ヒストリア、「美しき海の国へ～“テンペスト”琉球王国の450年～」NHK総合 2012年4月18日(水) 22:00～22:43を録画して視聴した。
- 13) 高良倉吉ほか監修『首里城 甦る琉球王国』海洋博覧会記念公園管理財団、2004年、p.26。
- 14) 前掲13)、pp.44-45。
- 15) 中継貿易国家として繁栄を極めていた当時の琉球の様子を記している梵鐘である。万国津梁の鐘と通称されるこの梵鐘は、現在沖縄県立博物館で展示されている。
- 16) モンゴル勢力が中国侵入の機会をうかがっていたので、明は軍事行動を継続していかなければならず、そのために火薬の原料となる硫黄と、前線に軍需物資を運ぶ馬の確保が必要だったと言われている。
- 17) 高良倉吉、『琉球の時代』ちくま学芸文庫、2012年 pp.112-120。
- 18) 梅木哲人、『新琉球国の歴史』法政大学出版局、2013年、pp.101-112。
- 19) 前掲11)、pp.145-150。
- 20) 前掲11)、pp.32-38。